

註 解

(1) *Suqančir*. 此の語はラドロフ氏譯の法華經普門品 (*Kuan-ši-im Pusal*) の第七十二行及び、同書に「大般若經の斷片？」として附録せる殘經 (即ち此の八陽神呪經の斷片なること解題に於て述べたるが如し) の第三行目の兩所に出で、同氏は此の語については知る所なきを云ひ、只だ前後の關係上 *ausgezeichnet, angenehm, lieblich* 等と譯せり (同書五十九頁及び九十九頁參照)、之を漢文に對照するに、普門品に見ゆるものは、「妙相」の「妙」に相當し、後者もまた本書第百三十五行に見ゆる「妙音聲」の「妙」にあたるものなり、而して本書第百三十五行には、ラドロフ氏本の *suqančir* の代りに *tüzün* なる語を用ゐたれば、兩語の意味は相等しきものなるを知るべし、*tüzün* は極めて普通に用ゐらるゝ言葉にして善良・善妙の意なれば、*suqančir* も亦た同意にして、常に「妙」に對して用ゐられたるものなり。

(2) *qudru tınglang*. 此の語もラドロフ氏譯の普門品第百七十五行目に見ゆ、たゞ同氏の音譯によれば前の語は *qudnu* にして、*r* と *n* との相違あれど、もとより同語にして、*r* の字が (ウイグル文字の) 極めて *n* 字と紛らはしきより、或は氏の誤寫せられたるものには非るべきか、而して氏は之を *qodin* の *gerund form* なりとして、*hinter sich zurücklassen* と譯せり (同書五十九頁)、されど漢文普門品に就て考ふるに此の二語は「汝聽」に相當するものにして、氏の譯出せる如き意は存せず、「汝聽」の語は *tınglang* (即ち動詞「聽く」の單數第二人稱命令法) の一語にて示せるものなれば、*qudru* には別に意味の存するものならざる可らず、思ふに此の語は此處に見ゆるが如く「諦聽」の「諦」に當るものにして、此の外にも百九十三行及び二百五十七行にも見え、等しく「諦」に對せしめたり。

(3) 文字判然せざれども *qolusuz* なるべし、*qolu* は「永き時」に當る語なれば、*ödsüz* と同義の語を重ね用ゐたるものに外ならず。

(4) 文字缺けて明らかに讀む能はざれども、第八十七行の例に就て考がふれば、必らず *bititsär* なるべし、此の語は *bitmek* (書く) の *causative form* にして、「書かしむ」の意なり。

(5) 此の語はミューラー氏の *Uigurica*, I. S. 58. に *šmnu* と見え、從來 *šimnu* 或は *šumnu* の形にて、只だ蒙古語にのみ存すと認められたるものなり。

(6) *äv barq*. 此の二語は漢文の「家」或は「宅」なる語に對して、常に重ね用ゐらるゝものにして、本書に於ても此の外第五十八行、第七十五行、第二百三十七行、第二百八十三行、第三百七十二行等に於て其の例を認むべし、而してルコック氏ミューラー氏等皆之を *Haus und Hausrath* と譯せり、*barq* は *bar+q* の形にして *bar*